



日本クリスチャン・ペンクラブ(JCP)

文は信なり

発行責任者・事務局・三浦喜代子

〒131-0043
墨田区立花 4-6-13
TEL&FAX
03-3616-8621
郵便振 00170-0-161838
HP: <http://jcp.daa.jp>

池田先生の足あと

告別の日から初対面までを遡って

三浦喜代子

二〇一三年三月二八日、先生は二四年間牧会された最愛の霞が関キリスト教会の講壇前に、棺に納まって眠っておられた。ホスピスのお部屋でお会いたし時と同じお姿であった。笑顔とさわやかなお声はなかったが、凛々しく神々しいほどであった。

その日は一日だけ春うららの桜日和になった。先生の最後のメール「満開の桜の下を自分の足で歩きたい」を思い出した。

おそらく、肉体の苦痛から解放された先生は、イエス様とともに、強くされた足腰で春風と桜花を満喫したに違いない。

その十日前、足音を忍ばせて病室を覗きこんだとき、意外にも、ベッドの上の先生はバツと目を開き顔を輝かせ「オッ！」と叫んで左手を高く上げられた。私たちペン友はなだれ込むようにベッドを取り囲んだ。

「賛美しましょう」と、先生からのお声掛けで『輝く日を仰ぐとき』

を歌った。病室にいることも忘れて。
二年半前、十年十一月例会前の委員会、先生は体調がよくないので年明けに検査すると珍しくくわしく語られた。

以後、病巣発見、手術、二三次にわたる抗ガン治療、転移、転院などの状況を刻々とメールで知らせてくださった。そのやり取りの数はゆうに百通を超える。そのたびに委員に知らせ、例会では全員で祈りに祈った。しかし病状ははかばかしくなかった。

三月初めに直々にお電話をいただいた。QOL(生活の質)を優先することになりました。と、ホスピス入院をほのめかされた。

二二日、石垣兄から召天の一報があった。数日して、妙子夫人から告別式の中で先生の思い出を語るように依頼された。

以下はそこからの抜粋である。

十 十 十

『先生がペンクラブデビューされたのは二六年前。熱海での全国大会夏季学校の時からでした。実は、私も初めて参加しました。この時が先生との初対面でした。新人同士であり、同じ同盟教団の先生であることからたいへん親しみを感じました。その後一九九八年に理事長になられ、以来、十五年間、会の霊的リーダーとして重責を全うされました。

私は、毎回の先生のメッセージが楽しみでした。そこには先生の文章家としての面目躍如たるものがありました。ちようど、サクランボの高級品、佐藤錦のように、熟考厳選された粒よりの言葉が息づいていました。これ

こそ情感と風格にみちた文学的あかし文章論的メッセージだと、心の中で快哉の叫びをあげました。日ごろから言葉と格闘している私たちは、一言、一言に耳をそばだてて拝聴してきました。

三月の初めにいただいたお電話で、先生は「第二テモテです、わたしもいよいよよ義の冠の用意されているところに行きます。肉体はボロボロですが、霊的には元気です」と、病の中とは思えない歯切れのよいスピードあるお声で話されました。



顧みれば、熱海での初対面から葬送まで、先生とは二六年に及ぶ長い歲月、JCPを真中にして密着のお交わりをいただいた。たいへん仕えやすい上司であった。ひとえに先生の寛容による。感謝でいっぱいです。

前号二七号の【文は信なり・希望号】の冒頭で先生は、『志を掲げて』と題して、約束の地をヘブロンと定めて、あの山地を私に下さいとヨシユアに願ひ出るカレブの信仰を例に、私たちにとつて志を掲げて求める『山地』は何でしょうかと、問われた。これこそJCPへの強烈なチャレンジであり、今思うに、私たち一人ひとりへの遺言ではなかったろうか。お互いに今まで以上に志を強固にし、迷わず、あかし文章道を前進したいと願わずにはいられない。

いつまでも残るものは信仰と希望と愛です。その中で一番すぐれているのは愛です。

(コリント人への手紙 I 13章 13節)

主イエス様の姿を見るごとく 石垣亮二



ハヤト先生ありがとうございました



・新しい牧師を迎える 一九八九年四月、新潟の松浜キリスト教会から、池田勇人牧師ご一家が私たちの教会へ赴任してきま

した。当時の牧師館は会堂と一緒に建てられており、約九十坪の敷地にギリギリで建てられており、建築年数も古い建築物をつぎはぎして増築したもので、おおよそ四十年くらい経っていたのではないかと代物でした。牧師夫人と三人の娘さんとのご家族でしたから、たいへん手狭でしかも木造の古さのため、ご不自由をおかけしていました。特にお風呂場は、先代の牧師さんも嘆いていましたが、ときどきウジが出てきて、とてもいやな思いをしておりました。それゆえ一刻も早く新会堂を建設したいと、教会員の皆さんが早くから祈りを重ねておりました。

・新会堂の建設へ 新会堂建設が、いよいよ具体的になってきたのは、池田先生が来てからでした。最初の候補地は見晴らしの良い近隣では一等地のところでした。見学した数人でお祈りをしましたが、地主さんがウンと言わず諦めるほかありませんでした。次の候補地は川越西小学校の隣で、紆余曲折の結果、三人の地主さんの許可をいただき、ようやく

約四百坪の土地を購入する事ができました。その後約三年間は「調整区域」のため、埼玉県と川越市の両方から「建築許可」がもら

えずに、大変な苦勞をいたしました。その間池田先生は私たちの目に見えないところで、建設のために奔走され、役所、銀行、教団事務所、地主さんなどに何度も足を運び、新会堂建設委員とともにご苦勞をいただきました。新会堂献堂式は一九九三年一月二十四日、多くの方々のご支援と祝福をいただいで行われました。神様の大きいなる恵に心から感謝したことでした。

・池田勇人牧師の礼拝説教 池田勇人先生の説教にも磨きがかかり(？)、当時、田んぼの中にぼつんと建っていた新会堂に、次第に訪れる方々が増え始め、三十人台だった教会員は今では七十人台となりました。池田先生の説教・牧会・訪問・相談・趣味などの活躍は、決して表に出して行動するのではなく、私たちの気付かないところ、そして優しく穏やかに、またじっくりと物事を進めてゆく姿勢は、ほんとうに頭の下がる思いでした。

体調を崩されてからは、講壇での説教は、日に日に主イエス様を思わせるように、静かな、それでいて胸に響く真剣さと、流れるようなご聖霊の導きを、私たちははつきりと受け取ることが出来ました。

今年に入ってから池田先生の説教題は、次のとおりです。

- 一月一日「この山地を私にください」ヨシユア記十四：12／一月六日「喜びの波紋」ヨハネ九：24／34／一月十三日「怒って当然」ヨナ書四：1／11／一月二十日「悲しみの果てに」マルコ十四：32／42／一月二十七日「ナオミの楽しみ」ルツ記四：13／17／二月十日「愛国と建国の意味」ダニエル書九17／23／二月二十四日「使命と目標の共有」

ピリピ二：12／18／三月十日「身辺整理の価値」イザヤ書三十八：1／3 説教代読。

池田先生は、一月の説教講壇は大変つらそうでした。二月に入ってから、椅子に座って説教をなさるようになり、お疲れにもかかわらず最終の締めくくりに入ると、ご聖霊により、涙を流されて説教をなさいました。本当に素晴らしい説教でした。私たちも涙を流さずには居られませんでした。

・池田勇人先生の才能と賜物 池田先生はみなさんご存知の通りとても才能豊かな方で、文章道は言うまでもなく、作詞作曲・ギター演奏・テノールでの賛美・押し花の葉制作・ダンボール紙を使った葉のデコパージュ・名前折込の歌・子供たちへの歌の作詞作曲・童謡唱歌の解説・世界の名画解説・おいしいジヤム作り・聖句の半紙書き・などなど。数え切れないほどの楽しい趣味をお持ちでした。

これらの宝物・賜物は、驚いたことに先生の独り占めではなく、すべて、教会員や近隣の方々、子供たちや少年たち、そして分け隔てのない優しい心遣いで多くの人々へのプレゼントとして、分かち与えてくださいました。特に「手製のジヤム作り」を出品された教会バザーでは、たくさんさんの空き瓶を利用して詰め込んだジヤムは、綺麗さっぱりと完売したものでした。池田先生の豊かな賜物の逸話は数えきれないほど沢山あります。一つ一つご紹介できないのが残念ですが、いづれみなさんから紹介されるだろうと思います。

・イエス様の姿を見るごとく 池田勇人牧師は、私たちを牧会されて二十五年もの長きにわたり、六十三才の若さで天に召されました。その一生は紛れもなくイエス様の跡をたどる

人生でした。私たちは、先生が体調を崩してからの二年四ヶ月の歩みは、まさに「イエスの姿を見るごとく」先生の礼拝説教、会話のやりとり、そして歩かれる姿まで、感動と感慨に満たされた日々でした。私たちは池田先生の足跡をたどり、これからも教会員一同、心を合わせて豊かな信仰生活を過ごしてゆきたいと願います。

種を育てる

駒田 隆

福音書を読んでいますと、イエスが「民衆にお話をされている場面がよく出てきます。そこでは、イエスは、民衆に分かるように、当時の習慣や、環境に即した話をされていました。ですから、彼らにとつて、イエスの話は、よく理解されたのです。」

池田先生のお話も、わたしには、いつもよく分かるお話でした。そこには、難しい単語も出てこず、横文字もあまりなく、先生のお話を通して、聖書にあることが、はっきりと理解出来たものです。

二〇一〇年一月の例会で、先生は、「福音の種を育てるためには、耕さなければならぬ」とお話しされました。

わたしは、先生を通して、福音の種をいただきました。その種を、いかにして育てていくかは、わたしに残された責任です。ただいた種を、蒔き、耕して、立派に育てねばなりません。それが、池田先生の霊に報いることになる、とわたしは考えています。

真のキリスト者

山本披露武

運営委員の人たちと、最後に池田先生のお見舞いにいったのは、三月十三日、先生が召



される九日前のことでした。

長く厳しい闘病生活のために、先生は別人かと思われるほど痩せて、スマートになっておられました。話される声も小さく、途切れとぎれでした。それでも先生は、わたしたちの見舞いを大変喜んでくださり、酸素マスクをはずしていっしょに祈り、いっしょに、讃美歌を歌ってくださいました。

讃美歌の途中で一瞬、先生は涙声になって目を押さえられました。が、すぐに笑顔をと

り戻して最後まで歌ってください、そのあと「いっしょに写真を撮りましょう」といつてベッドの上で起き上がり、みんなに囲まれるようにしてポーズまでとって下さいました。死を目前にして、尚そのように優しく振舞ってくださる先生の姿に、わたしは強く胸を打たれ、同時に、すでに死に打勝ち、勝利の栄冠をめざして、ひたすらゴールに向かって走っておられる、真のキリスト者の姿を見させていただいた思いがしました。

あのね

西山純子

先生は、一人ひとりに心をこめた指導を、交わりと愛をもって示し続けて下さいました。皆にとつて、こんなに大切に敬愛出来る、先生に出会わせて下さった神さまに、胸いっぱい感謝を申し上げたいです。

「あのね」は、先生の一人新聞の表題で、時々いただきました。先生の温かな人柄がそのままに手書きの文字の新聞で、神への感謝と御言葉を伝えながら、交友関係の広さ深さ、ご家族皆さんへの愛に満ちたものでした。『「あのね」改めマイ・コール・コール』は、三



月三日の発行で、先生のご葬儀でいただいた新聞です。その中の詩から、「朝の祈りの前に妻を探した。(中略)ベランダで洗濯物を干しているのを見つけ、アーよかったと思つた。一緒に生きて行く日々が、一日ずつ減つてゆき、いつか握つたこの手を離さねばならなくなるが、温もりだけはそつと天国へ持つて行けそうな気がする」私たちの祈りも、この最後の一節に励まされます。先生、あのね!

灯火

長谷川和子

軽井沢での夏期学校があつたのは何時のことだろう。たしか十数年前だと思ふ。恵みシヤレーは傾斜地を利用した建物。

宿泊する部屋から礼拝堂、食堂へは階段や渡り廊下を利用しないと移動できない。

池田先生が高齢者に乗せてピストン輸送で移動に協力。四〇代の先生が甲斐甲斐しく行動して下さつたお姿が鮮明に蘇つてくる。

先生はどんな時でも穏やかであつた。運営委員会では私たちの決定を快く受け入れ、意見がある時は一信徒の如く語られ、常に平穏な態度であつた。

先生と個人的にじっくりお話しする機会はなかつたが証し新書の中で「私のことを知つていて下さる」という安心感があつた。

「はい」と音楽のカセットテープを下さる時の先生の笑顔が浮かぶ。

三月十三日運営委員七名と帯津病院に伺つた時、先生は涙を流されて喜んで下さつた。「讃美歌を唄いましょう」とおっしゃる先生の言葉に頷きつつ、悲しみを堪えて主を賛美した。その



間先生の目尻から涙が流れ、側にいた私は何回もティッシュで拭かせて頂いた。先生に触れた最初で最後の行為であった。

この時のことが今、私の心の中で灯のように暖かく点っている。

忘れられないおくりもの 榎 尚子

初めて熱海の夏期学校に参加した時、池田先生と出会った。先生も私も初参加、児童文学の分科会で、誰も知り合いがない私の隣に先生が坐られ、ふたこと言葉を交わした。高齢の方が多いペンクラブで、若い牧師先生の存在はひととき目立った。先生はその夏期学校で最優秀賞を取られた。数日後におめでとうの便りを差し上げると、すぐに返事が返ってきた。まるで古い友人のような、親しみあふれる便りだった。

それから何通、便りをしたことだろう。牧師である上にペンクラブ理事長をされ、どんなにかお忙しかったことか。先生からたくさんの時間をいただいていた私達は、言葉の世界を溢れるように広げていただいた。ユーモアに満ちた鋭い先生の一言は、私にとってオアシスであり、ヒントだった。

池田先生は、みんなに「わすれられないおくりもの」をくださった。先生からおくりられたものの豊かさは、今も生きています。

名前を頂いて 土筆文香

十年前、JCPに入会したばかりのころです。乳がんの手術を受けることを池田先生に話すと、手を取って祈って下さいました。

まだ死にたくないと言うと、「わたしはいつ死が訪れてもいよいよに死の備えをしている

のです」と言われました。そして星野富弘さんの詩「いのちが一番大切だと思っていたころ……」を書いた色紙を送って下さいました。

術後落ち込んだとき、この言葉で助けられたのでした。これは、後に先生ご自身が病の床で力を得た詩であると証ししておられます。

また、先生のおかげで「リピート・シンドローム」が出版されました。リストカットやドラッグを取り上げられているので、本名で出さない方がよいと言われる、厚かましくも先生にペンネームをつけてくださいとお願ひしました。先生はいくつかの候補を挙げて下さいました。その中から土筆文香を選ばせていただきました。土筆文香の名に恥じない文章を書いていかなうかと思っています。

イエスさまのような池田先生 荒井 文

先生とのお交わりは、所属教会が無牧の時、毎月一回先生が埼玉から来てご奉仕して下さいたところからです。そのころの私は生い立ちや家庭の事情など悩みが多く、お会いするたびに話を聞いていただいていた。この事を何とか文章にして子供たちに書き遺しておきたいと思いましたが、短い作文しか書けませんでした。先生は二年以上もご指導くださって、ようやく念願かなって自分史を書くことが出来ました。書く決心をするまで十年以上もかかりました。

その後、先生のご紹介により、JCPにも加入させていただきました。そして遠藤兄と知り合い、自分史を小冊子にしてくださいました。これは私の宝物です。先生は大の苦手だった作文を、楽しみに変えてくださったのです。私が明るく前向きに余生を歩めるよう

にしてくださいましたのは、池田先生でした。

池田先生がそこにおられるだけでやさしさと温かさを感じます。メッセージの一言一言に心強さを感じます。池田先生は私の人生を百八十度も、いやそれ以上変えてくださったのです。先生、本当にありがとうございます。何もお返しが出来ず、ごめんなさいね。

哀悼 曲山仰主(遠藤幸治)

あの日は不思議でならなかった。二日続けたの透析で血圧が低下してしまつたが、何の異常もなかった。看護師たちも不思議がり、帰宅後、妻に「今日の透析は奇跡だったと告げた。翌日、池田先生の帰天を知つた。ああ、先生が守ってくださいたのだと天を仰いだ。

先生の入院先を訪れたとき、先生は呼吸するのも困難な中、私の手を握りしめて、私のために祈ってくださいた。とめどなく涙が流れた。

尊敬してやまない池田先生に数々の思い出がある。御本や毎月いただいたお便りの数々。説教要旨や自作の新聞その他、絵の数々。封を切るのが楽しみだった。お交わりを赦された幸いを心から感謝したい。

前夜式の時、先生と別れを惜しむ参列者が、広い礼拝堂に入りきれないほどあふれていた。帰路の車窓から、霞ヶ関キリスト教会の十字架を仰ぎながら、天国での再会を望みつつも、「先生さようなら」と繰り返していた。

ご遺族の上に、神様の慰めと平安をお祈りし、先生のご意志を継ぐ者でありたい。

ダビデ王が、親友ヨナタンの死を悼む、「哀悼の歌」が思い浮かぶ。(サムエル記下1・17)

絶筆を託されて

島本耀子

事務局からもたらされる先生の病状に一喜一憂しつつ、ひたすら祈っていた。先生は巻頭を飾るメッセージを、25、26、27号と、最後まで寄せてくださった。ペンクラブに集う者たちのきずなを強く感ずる喜びであった。この大切な原稿が、読む人に深く捉えらるるよう、私たちは編集に心を砕いた。

先生は三篇を通して、信望愛に裏打ちされた言葉を心に届けようと望んでおられた。最後に、志を掲げて求めるべきは何であるかと、私たちに呼びかけてくださった。

「まだ救われていない人たちのために、神の愛を伝えていきたい。美しい日本語で、今日一日の命を感謝して」。六十周年の先生の礼拝メッセージが、今も胸に響いている。

池田先生に喜びの讚美を

山本千晶

私は二〇〇八年九月にペンクラブに入会しました。翌年の七月例会の後、池田先生から一枚のしおりと、一冊の本をいただきました。「お誕生日おめでとう。喜びが伝わる賛美の姿勢にハレルヤ！さらなる祝福を祈りつつ」しおりには先生からメッセージが。入会してまだ日の浅い私でしたが、賛美の姿勢を「喜び」のひとことであらわして下さったことがとても嬉しく励まされたことを思い出します。頂いた本のタイトルは「漢字は楽しい」。漢字が相互に関連性をもって成り立っていることを学べる楽しい本です。

池田先生は例会でいつも、楽しく喜びに満ちたキリスト者の生きざまを伝えて下さいました。後に、闘病中もユーモアに溢れたニューズレターを綴られていらつしやうしたこと

知りました。

穏やかで優しい先生がお伝えくださった御言葉は、困難な時にあっても喜びの賛美を伝える使命を自ら担われた先生のお姿から、生き生きと力強く私に届いています。

先生が召された翌日はペンクラブの例会でした。この出会いを与えて下さった神さまを喜び、池田先生の愛唱聖歌「聖歌615番」で、賛美を捧げました。

池田先生と私

志田 雅美

私にとって池田先生は、雲の上の人だった。ペンクラブに入会して日が浅い私と、理事をしておられ、そのうえ牧師という尊い職についておられる先生とは、あまりに立場がかけ離れていた。

だから、言葉を交わしても、ほんの挨拶程度だった。しかしある日、先生がメールをくださった。私の作品に対する批評だった。

先生が直々にメールを下さるとは夢にも思わなかったが、友人に宛てたように、親しみのかもった文章と、そこかしこに散りばめられた絵文字に、本当にこれが池田先生からかと驚いた。以来、先生は雲の上の人から尊敬する先輩に変わった。私も「文は信なり」をモットーに書ける人になりたいと心から思った。先生を思うと、このみ言葉が心に浮かぶ。「イエスは弟子たちの足を洗い、手ぬぐいでふき始められた」(ヨハネ十三章3〜5)

友人とは愛である

長山 知子

二月二日、ペンクラブ新年会で病床の池田先生が本を出版されたことを知り、電話をかけた。会員からの声に喜ばれ、がん闘病の経

過を話され、本は葬式に配るために書いたと言われた。私は何も答えられなかった。言葉が出ないときは直接会うしかないと思った。

二月二十四日、霞ヶ関キリスト教会の礼拝に出席、先生のメッセージを聞くことができた。礼拝後、会員一同に私を紹介された。「今日は私の古くからの友人が来てくれました」。友人、なんとうれしい言葉ではないか。娘が先生に花束を渡した。帰り際に、「私のもう一冊の本もあげるから」と言われた。先生買わせていただきますと答えると、「いや、友人がせっかくなってきたから」と、また友人と言ってくれた。私は先生と握手して「ご本の出版おめでとうございます」それしか言えずにお別れした。

帰宅後、二十年前の熱海夏期学校での集合写真を見た。先生も私も本場に若かった。

新入会員と作品の紹介

佐藤晶子さん(岩手県)
安藤奈穂美さん(茨城県)

東日本大震災から一年九ヶ月 佐藤 晶子

地震の一ヶ月前に、私は夫と二人で岩手の山間の町に引越し、二週間後に近くの教会を訪ねた。その二週間後に地震が起こった。

長く続く大きな揺れに、私は今まで感じたことのない激しい恐怖感で、自分をコントロールできなくなりました。毎日、無意識のように使っていたライフラインがすべて止まった。三日後やっと電気が通りテレビをつけて現実を知り恐怖が重なった。

余震の続く日々、地震のない土地へ引越し

たかった。逃げたかった。身も心も疲れてしまったのだ。

新潟の叔母から何度も電話をもらった。遠方の家族や親戚の人達が私達夫婦の無事を知って涙声で喜んでくれた。教会の友人や同級生も心配してメールをくれた。

私は、偶然行った教会で主に癒され次第に自分を取り戻し立ち上がって歩き始められるようになった。心に平安を得て主の働きに加わり、喜び感謝のうちに教会生活を送ることができるようになった。

聖書の中で、ずっと不思議だと思っていた箇所がある、使徒言行録十六章、投獄されたパウロとシラスが真夜中に賛美し祈っていると突然、大地震が起こり、囚人達の鎖が外れてしまい、看守が責任をとって自殺しようとするのをパウロが、逃げないからと諭した記述である。

ハッとした。地震が契機になり、その後の奇跡に繋がった事に私は希望を持った。パウロの時のように、救い主イエスの存在を信じる者がきつと起こされるに違いないと思ったからだ。

教会では、礼拝の中で念願だったオカリナによる賛美ができるようになった。私は支えてくださった教会に入会する決心をした。

何と恵み深き主の愛と希望なのだろうか。私はこれからもこの土地で主を賛美しながら主を証ししていきたいと祈る。

オリオン座に想う 安東奈穂美

「ほら、見て、オリオン座がみえるよ」
何度となく子供達に言ってきた。見つけるたびに言いたくなるのである。

その名前を知ったのは小学三、四年生の頃、国語の教科書で星座についての文章を読んだ時だと思う。ほかに北斗星や幾つかの星座について書かれていたはずだが記憶は曖昧だ。

子供の頃、風呂のないアパートに住んでいた。家から道路を渡って電車のガードをくぐり、戸建ての家やアパート、小さな美容室が並ぶさして広くない道を行くと正面には銭湯の煙突が見える。銭湯に行くのはたいてい夜だったので晴れていれば星が見えただろう。

オリオン座は一目でそれとわかるから印象に残ったのか、教科書で名前を覚えたから、認識したのかはわからない。星、と言われれば懐かしい感情を伴って心に思い浮かぶのだ。

それは、いつも傍らを母が歩いていたらかもしれない。風呂のある家に越して二年もたたないうちに突然の別れがきた。その時、母、三十九歳、私は十八歳。

知らず知らず、喪失感を抱えて生きてきた気がする。特に、初めての妊娠や出産のときは、里帰り出産をしている人を見て自分には母親がいないのだ、と改めて思わされたものだ。それでも、秋から冬になりオリオン座が見えると心の中が明るくなるのだった。

母と共に歩きながら夜空を見上げた日数は少ないかもしれないが、幸福感を伴う思い出が与えられたのだ、と気づいた。

目に見えず形に残らない記憶でも人を生かす力がある。私は子供達に何を残せるだろう。ずっと先を見ることはできないが、たとえ私が何も残せなかったとしても一人ひとりにふさわしく生きる力が与えられるに違いない。それぞれのストーリーを想像しながら、これからオリオン座に出会うと浮き立つよう

な気分の中でつぶやくだろう。

— あ、オリオン座 —

(童話とエッセーの会。四月二十七日の課題、『星』からの作品です)

◆余滴として

池田先生を最後まで慰め励ましたのは星野富弘さんの詩でした。

いのちが一番大切だと／思っていたころ
生きるのは苦しかった／
いのちより大切なものが／あると知った日
生きているのが／嬉しかった

福音の力で視点を変えたとき、絶望ではなく希望が見え、生かされている感謝が生まれたのです。(K・M)

編集後記

★新入会者のお二人は昨年十月に行われた60周年の実です。佐藤姉は満江師時代に一時期、会員でした。安東姉は大田師の教え子さんで、先生から勧められ、その後例会へ参加、今年、入会されました。感謝！

★この追悼号は『JCPの記念として長く保存しておきたい一作です。急な呼びかけでしたが、皆様よく寄稿してくださいました。いつものようにY・S姉が大奮闘、美しく仕上げてくださいました。これも感謝！委員会のワープロ化、校正の協力も多大です。イエスキリスにつなげた枝々には老いも勝てないようです。KM